

井戸平左衛門の頌徳碑を訪ねて②1

錦織玄秀の碑と並んで建つ井戸公碑

大田町 石 賀 了

美郷町

井戸平左衛門公(以下「井戸さん」)の頌徳碑は、川合町吉永 530基あるとされ、宮本さんはそのうち465基を自身の足で踏査している。

一人の力でここまで調査されたのは偉大なことで、だれにも真似のできないことだが、しかし、一人の力には限界もやはりあり、各地で、そこに住んでいる人たちが調査を進めると、まだまた「新発見」の碑が見つかる。2年前に当協会で井戸公の特別展をし、市内の約100基の碑の写真を展示したところ、「うちの近くにもある」と申し出があったものも数基ある。浜田市弥栄町でも、井戸公碑のマップを作るために調査したところ、宮本調査では17基だったものが24基あったことが分かった。

お隣的美郷町では、「銀山街道を護る会」の道下良徹さんらが調べて歩いた。



▷ 錦織玄秀の碑(左)と並んで建てられている井戸公碑

調査は2012年のことだ。そのころ、宮本さんの資料がまだ江津市の舞乃市に展示してあり、そこで22基の頌徳碑を知り、そこでデータを元に現地を調査した。実際に歩くと、宮本調査より3基多い25基あることが分かった。すべての碑の写真を撮り、地図に落とし、一覧表を作成した。

同年7月23日「井戸平左衛門頌徳碑巡り」のイベントを実施されたので私も参加した。かなり暑い日で、午後には熱中症気味になったが、道下さんはパワフルでエネルギーが、疲れを知らない人で、最後までハイテンションで、私たちを案内してくださった。

氏のホームページでは「先祖の命を救ってくれた井戸平左衛門。その徳に報い、厳しい財源の中から村を挙げて頌徳碑を建てた先祖、そのときの気持ちを感じ起こしてもらうためにも、(町内の方にも)今一度近くの頌徳碑を訪ねていただきたい」

と書いています。その日の道下さんとの話の中で、最も記憶に残っているのは「もっと早くに調査すればよかったです」というものだった。探して歩き、長老に尋ねると「自分の親か祖父は知っていたと思うが」という声が何か所かで聞かれたからだという。



◁ 路傍に立つ何も彫られていない井戸公碑。近くの人が花を供えていた

もっと見つかったいたのではないかというのだ。今更時間をさかのぼることはできないが、だからこそ、1日も早く、調査を進めなければ、と気持ちだけが焦る。

そして、もう一つ美郷町で特徴的だったのは、井戸さんが亡くなる直前の何日間か、招かれて笠岡陣屋で診察した築瀬村(現美郷町)の医師、錦織玄秀の石碑と並んで建てられた頌徳碑があったこと。玄秀の直系は残っていないが、縁者である尾原重雄さんが大正6年に「錦織玄秀先生之碑」を、尾原操軒さんが大正15年に玄秀の碑の隣に「井戸明府碑」を建てたものだ。場所はJR梁瀬駅近くの町道沿い。

また、井戸さんの石碑にかかわる祭りは、道下さんによれば、美郷町内ではどこもしていないということだったが、粕淵の浄土寺では毎年10月に、芋ごはん、芋入りの吸い物、芋の天ぷらなどをいただき、井戸さんの遺徳や、食への感謝の気持ちを再認識する法話を聞く「芋法座」が、今でも続けられている。

調査をしていけば、そんな碑が

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて ②② 邑南町日貫の「19分の10の理由」

大田町 石 賀

了

前号までに川本町、美郷町の井戸公碑を紹介し、次はどこにしようかと、例によって川合町の故宮本豊さんの調査資料に目を通すと、邑南町には28基の井戸公碑があった。

邑智郡邑南町は瑞穂町、石見町、羽須美村が平成16年に合併して誕生した。井戸公碑は旧瑞穂町に9基、旧石見町に19基あり(以下町名の「旧」は省略)、石見町の井戸公碑のうち、「日貫(ひぬい)」という地域に、何と半数以上の10基もある。

まず、「日貫」の場所がわからなかったため、地図を見てみた。石見町の北西部にあり、大田市の私たちが広島に行くにしても、

まず、「日貫」の場所がわからなかったため、地図を見てみた。石見町の北西部にあり、大田市の私たちが広島に行くにしても、

スキーに行くにしても、通り道ではない。日貫がどんな地域で、なぜ10基もの井戸公碑があるのか、それが今回のテーマだ。

日貫では日貫公民館の鹿野好明館長、山崎武元館長、石見町の石碑を調べて「いしづみ」に詳しくまとめたメンバーの1人、服部忠司さんの3人に話を聞くことができた。

日貫は県道7号が東西を横断、南北には高い山があり、日貫川沿いに集落が点在する。今でも平地はあまりないが、少ない平地は江戸時代に製鉄でできた

地は江戸時代に製鉄でできた「鉄穴(かんな)流し」でできたものが多い。江戸時代、日貫は製鉄で栄え、石見町のほかの

地域も瑞穂町も浜田藩だったが、日貫だけは津和野藩に属し、日貫組として代官所も置かれていたという。日貫



▷宝光寺の「泰雲院殿義岳良忠居士」碑

のもう一つの特

産は和紙で、津和野藩は特に日貫の和紙を珍重するなど、かなりの繁栄ぶりだったようだ。面積は石見町の中では最も広く、人口も、江戸時代末期には矢上に次いで多い1801人という記録がある。浜田・川本間の交

通の要衝でもあった。約5000人に減った人口の中でも5つの神楽社中が存続していることから、往時の日貫のにぎわいと繁栄ぶりが想像できる。

そうした繁栄の中、米づくりには適しておらず、サツマイモのお世話になったという意識があった日貫の人たちは、次々に井戸公碑を建てていったのだらう。山崎さんは「集落は14あったので、10基建つても不思議ではない」と言う。1615

年までは銀山領だったという記録もあり、日貫の人たちの気持ちの中に、銀山領に対する親近感があったのかもしれない。

境内に井戸公碑がある宝光寺のご住職は、日貫の生まれではなく、20年前からお寺を守っており「ほかから来たからよけいに感じるが、日貫には神仏を大切にされる方が多い」と言う。そんな日貫では、頌徳碑を建てて井戸さんとサツマイモに感謝の気持ちを表すのは「ごく自然のこと」だったように思われる。

井戸公碑は今でも日貫で



▷散策マップひぬいさんぽ



△日貫小児童制作の「日貫カルタ」

は大切にされており、日貫公民館が発行した「散策マップひぬいさんぽ」には井戸さんの紹介記事と、10基の写真が地図とともに掲載されている。

ふるさとを大切に思う日貫では、小学校でもしっかりと井戸さんのことが伝えられており、平成24年に、当時の4年生2人と担任の先生が作った「日貫カルタ」にも「江戸時代いも代官が民すくう」宝光寺いも代官の石ひあり」の2枚が入っている。

宝光寺では今でも毎年12月に芋法事があり、ほかにも井戸公碑の供養を毎年営んでいる自治会が2つもあるという。その取材にかけ、今号の続編として紹介したいと思っている。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて ②③

石工のユニークな詩が残る邑南町の碑

大田町 石 賀 了

邑智郡邑南町は瑞穂町、石見町、羽須美村の3町村が合併して、平成16年10月に誕生した。邑南町には28基の井戸公碑があり、内訳は瑞穂町が9基、石見町が19基で、石見町の19基のうち10基が「日貫」という地区にあることを前号で紹介した。

瑞穂町の9基のうち、川合町の故宮本豊さんの資料によると、1基だけ「調査中」とされているため、邑南町の田所公民館の吉川正館長に確認したところ、わざわざ現地に向いて調査していた、だき「存在していない」ことが分かった。このため現状では瑞穂町の井戸公碑は8基ということになる。

石見町に比べると少ないのはなぜかと考え、いろいろな文献を調べてみると、昭和32年の瑞穂町の誕生について書かれた出版物に次のような記述が見えた。

「わが国は古来より瑞穂の国といわれ日本の美称とされてきたところで、本村また往古神稲の郷と称され伊勢神宮に献穀の古事もあり、当村は郡内における唯一の米産地であります」。

米の産地という自負も実績もあり、サツマイモに命を助けられたという実感がそれほどなかったのかもしれない。ただ、8基という数は1町村に存在する数として少ない数ではない。

吉川館長に、特徴的な碑を教えていただいたので、2基を紹介する。1基は、上田所上野原の碑で、国道261号の西側に並行して走る道路沿いにある「井戸君碑」。高さ48センチの台石の上に乘せられた140センチの自然石の碑石に4文字が力強い。明治44年の建立だ。文字の彫りも深く、墨書なら「墨痕鮮やかな」どつしりとした碑だ。

もう1基は、国道261号の馬野原口から県道7号を約3キ

東に入った、馬野原上集会所の裏山にある碑で、裏山の山頂(といっても1分ほど登るだけだが)に祠と並んで建っている。高さ40センチの台石の上に180センチのすらりとした自然石の碑石が乗り、「井戸正明君碑」と彫られている。大正3年の建立で「馬野原中」とあるので、馬野原の皆さんが力を合わせて建てたということがわかるが、興味深いのは碑石の左面。

下の方に石工の名が彫られているのだが、「石工 矢上」は徳利の形で囲まれ、その口から盃

に注がれる酒の代わりに短冊があり、そこに「植田勘治郎」と彫つてある。おまけに、その上には詩のようなものが彫られていて、原文では「酒さい／飲バ／みわはたかても／やどの可／志ちにをくかな／雲洲石夢」とあり、現代文に訳すと「酒さえ飲めれば、身は裸でも、妻を質に置かな(酒さえ飲めるなら、妻を質に入れるよ)」というふうに通じるだろうか。

こんなことを彫つて、依頼主の馬野原の皆さんは怒らなかつたのだろうかと思つたりした。心の広い井戸さんは、空の上から「まあよいではないか」と笑つておられるだろうか。



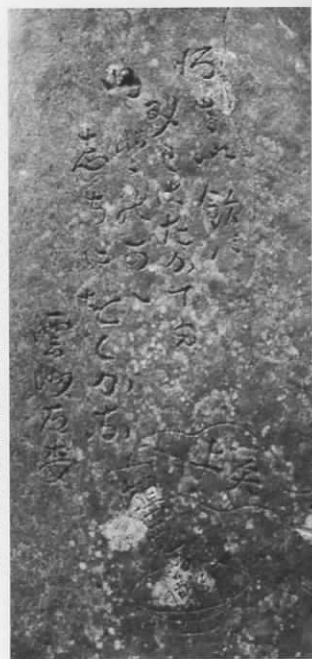
邑南町(旧瑞穂町) 上田所の「井戸君碑」

馬野原口から県道7号を約3キ

東に入った、馬野原上集会所の裏山にある碑で、裏山の山頂(といっても1分ほど登るだけだが)に祠と並んで建っている。高さ40センチの台石の上に180センチのすらりとした自然石の碑石が乗り、「井戸正明君碑」と彫られている。大正3年の建立で「馬野原中」とあるので、馬野原の皆さんが力を合わせて建てたということがわかるが、興味深いのは碑石の左面。



邑南町(旧瑞穂町) 馬野原の「井戸正明君碑」



碑石の左側の下部に彫られた石工の名前と詩のようなもの

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて②4

寺院と自治会館で続けられる芋法事

大田町 石 賀 了

邑南町日貫

前2号で邑南町の井戸公碑を
紹介し、旧瑞穂町に8基、旧石
見町に19基あり、旧石見町の中
でも、日貫(ひぬい)に10基あ
ることを紹介した。前々回の取
材で訪ねた日貫で、芋法事が今
でもあると聞き、昨年12月と今

年2月にお参り
してきた。
12月に芋法事
があったのは、
境内に井戸公碑

がある浄土宗の宝光寺(山本昌
利住職)。「泰雲院殿義岳良忠居
士」の石碑には建立年が彫
られていないが、お寺には
白木の位牌があり、その裏
面に「境内石碑明治廿八年
十月廿四日建」と墨書され
ているので、明治28年に建
てられたことがわかる。

また、井戸公の遺訓と肖
像が描かれた掛軸もある。
掛軸があるのは珍しいが、
この掛軸は軸装こそ違おうが
大森町の井戸神社の掛軸と
同じもの。「贈従四位井戸
正明翁肖像」とあるので、
井戸公に贈位された明治43
年11月以降のもの。

肖像に見覚えがあったの
で調べてみると、明治44年
に井戸神社再建のために印

刷された趣意書「井戸神社興復
企画大計要」に描かれているも
のと同じだった。趣意書には遺
訓も紹介されている。
宝光寺の芋法事は信行奉仕に
続いて行われた。10時前に約20
人の檀信徒さんが集まり、本堂
の中と、境内や石段の清掃など
をていねいに行った。

信行奉仕が終わると仏名会を
兼ねて芋法事が始まり、柱に井
戸公の掛軸をかけ、位牌を仏壇
の中央に置いて読経があった。
法話では「芋殿さんに今年も無
事に終えられたことをお伝えし
た」と話された。

その後「芋殿さんに報恩の、
芋がゆを召し上がっていただき
ます」と案内された庫裏で、芋
がゆ、煮しめ、漬物のおときを
いただいた。芋がゆには大きめ

のサツマイモのぶつ切りが2個
も入り、番茶で炊いてあるため
汁は茶色で香ばしく、おいしく
いただいた。

2月19日には、自治会内に3
基の井戸公碑が
ある春日自治会
館で芋法事が
あった。面積が
広い日貫では、

約40年前に自治会が合併し、現
在は5自治会になっている。
芋供養は地藏供養を兼ねたも
ので、毎年この時期にある。以
前は1年間の地域の共同農作業
の予定などを決めていたが、共
同作業がなくなった今でも、芋

法事と地藏供養は続けている。
例年は和室であるが、今年も参
加者が25人と多かったため、仏
壇を広間に移動して行った。
仏壇には「泰雲院殿義岳良忠
居士追善」の小さな塔婆が立て
かけられ、お供えにはもちろん
サツマイモもあった。仏壇の近
くに、宝光寺の山本住職持参の
井戸公の掛軸がかけられ、てい
ねいなお経があげられ、地域の
10体の地藏を1体ずつ読み上げ
て供養された。法話では「報恩
謝徳」のことなどを話され、こ
うして芋法事を続けることが報
恩謝徳である、と話された。
法事後、参列された皆さん
と短い時間お話ししたが、皆さん
井戸公碑の場所をよくご存じて、
「ときどき花を供えています」
と話される女性もおられた。
ほかにも、自治会内に4基の
井戸公碑がある福原自治会で毎
年8月に地藏盆を兼ねて芋法事
を営んでいる。7体ある地藏を
毎年1体ずつ自治会館に運び込
んで法事をするという、「神仏
を大切に」「日貫の皆さんが、
井戸公碑も当然のように「神仏
の中に含め、大切にされている
ことがうれしかった。」



▷宝光寺の芋法事(昨年12月)



△宝光寺の掛軸



△春日自治会の芋法事(2月19日)

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて② もう一つの暉恩伝「井戸賢君乃畧記」

大田町 石 賀 了

仁摩町馬路山 崎家

江戸時代に基聖と呼ばれた本因坊道策の生家、仁摩町馬路の山崎家で、先日、ご当主の山崎恵美さんから興味深い掛け軸を見せていただいたので紹介する。「井戸賢君乃畧記」と書かれた、大ぶりの掛け軸で、用紙いっぱいにはびっしりと、達筆な文字が書き連ねてある。早速、大田町城山の大場格先生にお願いして読んでいただいた。

文字は題名から署名までで604字。井戸公の功績をまとめたもので、末尾に和歌も添えられている。署名は「西濃正聚房僧純」で、「64歳の寅年に山崎氏の需に応じて」とある。

本文は「民を思う優しい井戸公が南海の僧から芋種の話聞いて薩摩から百斤の芋種を得て村里に配分し、一同は植え広めた。享保17年の秋にうんかがわいて大凶年になり、井戸公は年貢をゆるめたり他国に米穀を求めて民を救った。ほかにも数多くの功績があるが享保18年5月

に亡くなった」という内容で、井戸公の遺徳が過不足なく、しかも印象的に書かれている。最後の和歌は本人のものと思われ「山乃井のわきてめぐみのふかきゆゑくみてこそしれかずの碑」とある。「山の井戸からわき出る水は恵みが深く、水を汲んでこそありがたさがわかるが、井戸公も、讃える碑が数多く建てられていることから遺徳の深さがわかる」といった意味だろうか。井戸公と、山の井戸をかけている点、頌徳碑の数の多さから遺徳の大きさが偲ばれるとした点など、すばらしい内容だ。

本文を何度か読み返して、思い出された文献がある。同じく仁摩町馬路の満行寺に伝わる「暉恩伝」だ。これは、井戸公の遺徳を紹介した長文で、石見部の寺院で盛んに行われていた芋法事の際に僧侶が読み上げたもの。「頌徳文」「讃徳文」「甘諸代官略伝」などいくつ種類がある。暉恩伝に詳しい浜田市の河田竹夫さんによると、芋法事で暉恩伝が読み上げられると「善男善女は涙を流して聴聞した」という。満行寺の暉恩伝は約5頁の長い巻物で、掛け軸の書は暉恩伝にある印象的な言葉や言い回し



△山崎家の「井戸賢君乃畧記」

をそのまま流用しながら短くまとめた、という印象だ。

掛け軸を書いた「西濃正聚房僧純」を調べてみた。西濃とは美濃国の西部で、現在の岐阜県南西部。その正聚房僧純(せいしゅうぼうそうじゅん)とい

う僧が64歳の年で寅年に書いたとある。インターネットの調査では、僧純の生存期間は1791年から1872年。1854年(安政元年)が甲寅で、この年に僧純は数えて64歳なので、この人に間違いなさそうだ。

僧純は親鸞聖人600回忌の1861年に「親鸞聖人霊瑞編」を編さんし、ほかに「法の道しば」「妙好人伝」などの著書もあるようだ。

ここまでの調べで、この掛け軸は西美濃の正聚房僧純という高僧が、山崎家の当主の求めに依って、井戸公の功績を書き上げた、とわかる。

だが、なぜ、井戸公のことを知っているとは思えない西美濃の僧が馬路で井戸公の功績を書いたのかという疑問が残る。

以下は私の独断による推測だ。

僧純は遊歴して馬路を訪れ、山崎家が満行寺に長期逗留していた。あるいは親鸞聖人霊瑞編編さんの調査のために、全国を歩いていたのかもしれない。

その折に、以前から井戸公に感謝し、1837年に満行寺で完成した暉恩伝を高く評価し、芋法事のとぎだけでなく、いつでも読むことができ、人にも読んでほしいと思っていた山崎家のご当主が、僧純に執筆を依頼した。

僧純は「私は井戸公のことを存じ上げませんので無理です」と断つたが、山崎さんが「暉恩伝から抜粋してくればいいから」と熱心に頼むと、熱意に負けた僧純は暉恩伝を何度も熟読し、掛け軸に収まるよう工夫してまとめ、自分の印象を和歌に詠んだのだらうと、私は思っている。

5頁の巻物をいつも開いて読むわけにはいかない。掛け軸になつていけば、より多くの人に井戸公の遺徳を伝えることができる、山崎さんは喜んだのではないか。

「井戸賢君乃畧記」はもう一つの「暉恩伝」といえるだろう。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて②6

旧松江市内にはただ1基の井戸公碑

大田町 石 賀

了

井戸公の命日である5月26日に近い日曜日に、毎年大森町で開かれる「井戸公顕彰俳句大会」。江戸時代から俳句が盛んだった大森町で、以前も長く続いていたが一時中断し、再開してから今年で第30回となった。現在は井戸公顕彰俳句同好会（小沢牛跡会長）が主催している。

この大会は当日の午前中大森町内を吟行して、昼までに投句するのが基本。今年は県内や鳥取県から34人の参加があった。以前は50人を超える参加があり、小沢会長は「続けることが

一番だが、もつと多くの参加があればうれしい」と話している。この大会に松江市から10年以上も参加されている方を紹介していただいた。お一人は俳誌「城」編集長の足立歩久さん。足立さんは大会の選者である佐藤夫雨子さんとともに参加するようになり、大会参加を契機に、大田町の田中通さんが著された「芋代官」などを読んで研究され、大会以外にも石見銀山に何度も足を運ばれて、大久保間歩にも4回行かれたとか。大会では必ず井戸神社を訪れるほか、

▽大根島研究所が発売した「幽鬼」
芋焼酎



大森を吟行される。今年の大会で選者選の特選に選ばれた足立さんの句。農継ぐは寺守ること芋を挿す
もうお一人は俳誌「白魚火（しらおび）」幹部同人の森山暢子（まさこ）さん。20年来参加されており、早世された弟さんが大田高校に通われていたこともあって、大田や大森に親近感をお持ちだ。森山さんも大会では必ず町内を吟行されるとか。森山さんの句。

宮本豊さんの調べによると、松江市には35基の井戸公碑があるが、美保関町に19基、島根町と八束町に各7基、鹿島町に1基あって、旧松江市には手角町に1基あるだけだ。その手角町に行ってみた。松江城から美保関に向かつて走る約14km。石碑は国道431号線沿いの象田寺の境内にあり、溶岩石と思われる、穴がたくさん開いた台石の上に高さ95cmの自然石が乗り、「泰雲院殿」の4文字が彫られている。裏面に彫られた文字を読むと天保5年（1834年）の建立のようだ。島根半島の石碑は天保年間のもが多く、天保4年から始まった天保の飢饉の影響が及んでいたのかもしれない。在宅だったご住職にお話を聞くと、手角は以前、美保関町だった時代があるという。島根半島の井戸公碑探訪は今後の宿題だ。松江市ではもう一つ興味深いことがあった。八束町の合同会社「大根島研究所」が芋焼酎を発売したという毎日新聞の記事



△松江市手角町の「泰雲院殿」碑

それともそのはず、川合町の故を讀んだ。その焼酎は原料に、焼き芋にすると冷めても甘い安納芋（種子島原産）を使い、甘さを最大限に引き出すため、収穫してから1か月寝かせてから焼き芋にし、さらに4か月冷蔵保存してから加工するという。無ろ過原酒でアルコール度数は37〜38%。720ミリ入り1本が5000円（+税）とかなり高いが、芋の香り高く濃密な味わいだ。八束町波入にある会社を訪ね、代表社員の豊島美紀さんに話を聞くと、大根島では昔からサツマイモの栽培が盛んで、火山活動でできた大根島の黒ぼく土によく合っており、安納芋の栽培も難しくないといい。焼酎の名は、島に二つある溶岩隧道の一つ「幽鬼洞」から「幽鬼」と名付けた。今年製造した500本は、主に島内での販売だが完売間近で、来年は1000本を目標にしているという。残念ながら豊島さんは井戸公のことはご存じなく、お話をしたら「井戸さんのことを知っていたら、焼酎を造る上で、違う物語ができていたかもしれないね」と笑っていた。

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて②

井戸神社に市内の井戸公碑の案内板 新たに発見された3基を含む100基

大田町 石 賀 了

昨年10月、文化協会の齋藤寛 副会長が会長をされている大田ロータリークラブが、大田市内の100基の井戸公碑の写真と場所を、功績を紹介した文章と

ともに1枚の大型看板にして、井戸神社に奉納された。平成24年に同クラブが井戸公の調査をしてマップ(冊子)を作成したが、その後発見されたものを追加して看板にしたもの。その冊子には102基の碑が掲載されていたが、未確認のものもあり、確認されていたのは97基だった。その後、私が友人らと確認作業をしたが、5基とも確認には至らなかった。

一方で、平成25年に文化協会が井戸公の特別展を開催したことを契機に、冊子に掲載されていない石碑の情報をいくつか教えていただいたり、そのうち、確認できたものが温泉

津町福光に3基あったので、97基に3基を加えた結果、ちょうど100基を看板で紹介できた。その3基はいずれも、温泉津町福光の福富隆美さんから教えていただいたものだ。福富さんは福光地内の数々の石碑などを調べておられ、それを大きな地図に落とし、福波まちづくりセンターに掲示されている。看板に追加して紹介したのは、白谷地区の市道三差路にある「泰雲院殿義岳良忠居士」と、

林地区の西田さん宅裏にある「井明府之碑」と、浄光寺の墓地の入り口にある「井戸公之碑」の3基だ(写真左から)。新たに建てられたものではなく、以前

からあったものだが、私やロータリークラブの調査は、川合町吉永の故宮本豊さんの調査を元にして、宮本さんの資料がないものは「新発見」となる。ここが、井戸公碑調査の難しさであり、面白さでもある。宮本さんの調査は、この稿で何度か紹介したが、あくまでも宮本さんが一人で、ご自分の足を運んで調査されたもの。たった一人で約530基という

石碑を調べ上げられた宮本さんのご努力は尊敬に値するが、やはり限界もあり、調査漏れがあるのはどうしようもないことだ。逆に言えば、宮本さんの力及ばなかった場所に、まだまだ井戸公碑がある可能性があるということになる。ここが面白いところだ。

私が調査を始めて以来、宮本さんの資料以外に、大田市内外で約10基の井戸公碑が見つかった。ともあれ、平成29年末現在で確認された大田市内の井戸公碑100基が、井戸神社に看板として紹介されたことで、これを見た多くの皆さんに井戸公碑の存在と、井戸公の遺徳を知っていただく大きな力になることは間違いない。同クラブでは、以前発行した冊子を手入れして、100基版の冊子を制作されると聞いた。多くの方に関心を持ってもらえれば幸いだ。

まだまだ未知のものがあり、何年かかるかわからないが、今後は島根県内を確認して歩きながら、全体像を調べ上げることができれば、と思っている。



▷井戸神社に設置された大田市内の井戸公碑分布マップと大田ロータリークラブの皆さん



△温泉津町福光地内で確認され、井戸神社の案内板に加えられた3基

井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて②⑧

「七戸島」の人々を救ったサツマイモ

大田町 石 賀 了

益田 市
高 島

「益田市の高島にも井戸公碑があるらしい」と人づてに聞いて、川合町吉永の故宮本豊さんの資料を調べてみると、高島の井戸公碑はなかった。宮本さんの調査が始まったのが昭和50年で、その同じ年の3月に高島の島民全員が本土に移住して無人島となっているため、調査が行き届かなかつたものと思われる。



▷益田市鎌手海岸からの高島遠望

高島は益田市の東の端の沖合約12キに浮かぶ島で、東西1キ、南北300メの小島だが、「まるで鯨が波の上におどりあがったように、東西に横たわり一段の興味に旅人の心をそそる」というように、益田市と浜田市の境近くの海岸からよく見える。古くから親しまれており、神話にも「鷹が住んでいた島」としてその名がみえる。

人が住み始めたのは16世紀の戦国時代で「絶海の孤島で、当時敗残の武士が、深山幽谷にのがれたと等しく、この上ない絶好の隠れ家だった」という。

この島は周囲が崖で、船が着けられる場所は1カ所しかなく、南東の船着き場の近くに集落があった。周囲の海の豊かな漁業資源に恵まれた反面、飲料水は十分になく、水田は作れなかつたため米は本土から買い求め、島ではサツマイモ、ジャガイモ、粟、稗などを作っていた。だが悲しいことに多くの人が住むこ

とはできず、「小島なれば人家数むりに増難く、人類一百数にあまる時は、食類尽き怪奇発りて、住難き事有り」として、人口が増えるのを恐れていた。「怪奇」とは江戸時代の正徳2(1712)年のネズミの害のことを指しており、その数年前に住み着いたネズミがくまなく荒らし回り、作物を食い尽くした。この年、島民は本土への移住を求めたが許されず、許可なく全員が逃げ出し、藩主の命により4家族、18人だけが島に戻ったという。

以来、高島では戸数を7戸までとし、島は「七戸島」と呼ばれるようになった。

実際には、宝永7(1710)年には10戸47人が住み、ネズミ被害後も次第に増えて30人前後で推移し、昭和4年には11戸84人となり、昭和35年には16戸125人まで増えている。この間、昭和26年に貯水槽ができ、同27年に電気が点いた。



◁益田市高島の「井戸正明君之碑」(斯波健太郎「高島探検記」より)

人口を制限するほど、食糧に敏感だった高島にサツマイモが入ったのは天明年間(1780年代)以降であろうといわれる。井戸さんが銀山領にサツマイモをもたらししてから約50年後、やっと手にしたサツマイモを、どれほど高島の人たちが喜んだことか。その後サツマイモは高島の主要食糧にまでなった。

このことに感謝した島民は、集落の上の観音岩のそばに井戸公碑を建て「井戸正明君之碑」と刻んだ。島の人たちは「お芋さ

んと尊崇していた」という。高島に渡って、井戸公碑をこの目で見たいと思ひ、益田市役所や高島に近い鎌手公民館などで様子を聞いた。現在、高島周辺は魚釣りに出かける人が多く、渡船に乗せてもらえば上陸できることがわかったが、残念ながら、今回の原稿を書くまでには、上陸は間に合わなかった。

た、無人島になった高島を平成11年に訪ねて、その様子を本にまとめた人があった。それは浜田市の斯波健太郎さん(本名志波健二さん)で、「高島探検記」として発刊されている。斯波さんは高島の豊かな自然を研究するため上陸し、一人で島中を歩かれた。その本の中に井戸公碑の写真が掲載されているので、今回はそれを紹介する。近いうちに実際に高島を訪ね、自分の目で見、写真を撮りたいと思っている。

【参考文献】鎌手村尋常高等小学校「郷土誌」、矢富熊一郎「石見鎌手郷土誌」、同「高島の雑話」、同「謎の高島」、矢富徹夫「解説高島夜話」、斯波健太郎「高島探検記」ほか

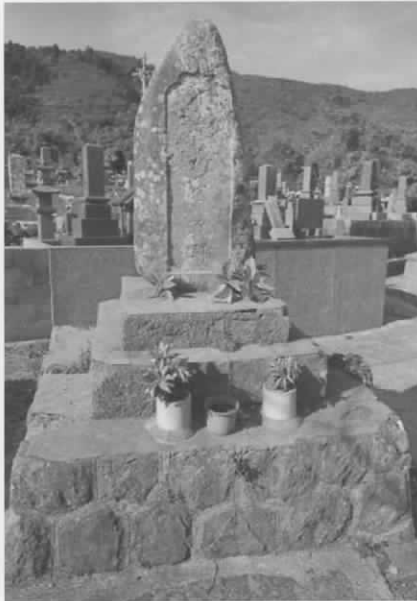
井戸平左衛門公の頌徳碑を訪ねて ②

隠岐 島前三島に十六基の井戸公碑

大田町 石 賀 了

隠岐の島の島前^{とうぜん}にある井戸公の頌徳碑16基の調査に、昨年11月、3泊4日の行程で行ってきた。その内容を今回と次号の2回で紹介する。

井戸公碑を調査し訪ね歩いた大田市川合町の故宮本豊さんは、平成元年までの調査で530基あると調べ上げ、そのうち465基を踏査された。未踏査が65基ということになり、隠岐の島の16基もその中に入っていた。宮本さんの調査では島後(隠岐の島町)は0で、島前の3つの島、中ノ島(海士町)に2基、西ノ



△島前で最も大きい西ノ島町赤ノ江の共同墓地に建つ「甘諸代官之碑」。2・5mあり、墓地にお参りした人が花などを供え大切にしている。

島(西ノ島町)に9基、知夫里島(知夫村)に5基となっていた。今回は、できれば1回で全部を調べたいと思い、3泊4日としてみた。行ってみると、島前には島と島を結ぶ「内航船」がかなりの便数で運行されていて、島間の移動は楽にできた。順調に調査が進んだのは、お世話になった各島在住の知人の尽力によるところが大きかった。それぞれの島で知人の自家用車で案内していただき、迷うことなく全ての井戸公碑を難なく調べることができた。一人での調

査ではとても1回では全部の調査は不可能だった。お世話になった皆さんに心から感謝したい。

資料として貴重だったのは昭和51年に隠岐島前教育委員会が発行した「島前の文化財」。その第6号に宇野力夫さんが「芋代官碑」を寄稿しており、島前の16基が紹介されている。42年前に調査をして資料を残していた人がいたことを喜んだ。

西ノ島町、知夫村ではほぼ地域ごとに建っているという状況だったが、3島の中では農業の盛んな海士町では、米も比較的好くできていて、サツマイモで命を救われたということが少なかったためか、最も少なかった。島前の井戸公碑調査の印象の第一は、石碑に刻まれた文字が薄くなっていたり剥落していたりして、文字を読むのが困難な石碑が多かったこと。建立時期は不明が9基、わかるものでは明治が4基、大正が1基、昭和に再建されたものが2基である。

△西ノ島町小向の井戸公碑。文字は何もないが神が供えてあった。



明治、大正期のものも読みにくいものが多く、隠岐の島には想像以上に風が強く吹き付けていることが感じられた。軟らかい石のものは早晩文字が読めなくなるのではないかと思われた。

また、集落ごとにある「お堂」の敷地内に建てられていることが多いのも特徴だ。お堂は、現在は集会所のように使われているが、たいてい部屋の奥に棚があつて仏像が安置されており、祈禱所や信仰礼拝、「島参り」と呼ぶ巡拝の接待所に使われたという。地区の集会所とは別に存在し、中には改築されて新しくなっているものもあつて、現在でも地域の皆さんの心のよりどころになつていようだった。敷地内の一角に地蔵や小さな祠、石碑が並んでいる場所があり、その中に井戸公碑も建っている。知夫村では3基がお堂の

横にあり(ほかの2基は神社境内)、西ノ島町では2基がお堂の横だった。単独で建っているものもあるが、道路沿いなどに地蔵や小さな祠、石碑が並んで建っている場所があり、そこに井戸公碑があることも多い。

今回調査した石碑はどれも印象深い。その中の一つは西ノ島町の小向にある小さな石碑で、旧道の坂道横に、下部をコンクリートで補強した土台の上に建っている。高さ66cmの自然石で、最初から全く何も文字が彫られていない。しかし昔から井戸公碑と伝えられて大切に守られてきた井戸公碑の原型といえるだろう。調査時も碑の花立てには神が生けてあつた。もう一つは同じく西ノ島町の船越にある、船引運河沿いの道の横に昭和46年に再建されたもの。総高さは79cmと小さいが、コンクリートの土台の上に2段の台石を積んで、凜として建ち「泰雲院義岳良忠居士」と彫られている。「船越区 建立」の文字からは、この地区の皆さんが風化して傷んだ旧碑に心を痛め、再建を実現させた思いの大きさが感じられた。(以下次号)

